

ホメーロスにおける Tmesis の問題

酒 見 紀 成

ギリシア語(並びにラテン語)文法に Tmesis という用語があるが、その用法がどうもはっきりしない。これは元来まとまりのある語が二分される場合に用いられ、またそれが $\tau\mu\tilde{\eta}\sigma\iota\varsigma$ の意味でもあるのだが、かなり早くからもっぱら動詞について用いられた。すなわち前つづりと基礎となる動詞が、すでに複合語となった後にも切り離されて生ずる場合に。ところがホメーロスでは、前つづり——普通は前置詞である——は、独立して副詞としてもよく用いられるので、どこまでが副詞で、どこから先が前つづりなのか、個々の例を前にして判断に苦しむことが多い。例えば、これはヘシオドスの「神統記」の 180～181 行目の文であるが、……, $\phi\acute{\iota}\lambda\omicron\upsilon\delta' \acute{\alpha}\pi\omicron \mu\acute{\eta}\delta\epsilon\alpha \pi\alpha\tau\rho\acute{o}\varsigma/\acute{\epsilon}\sigma\sigma\upsilon\mu\acute{\epsilon}\nu\omega\varsigma \acute{\eta}\mu\eta\sigma\epsilon$, 「すばやくわが父の陰部を刈り取って、……」において、 $\acute{\alpha}\pi\omicron$ はおそらく $\acute{\alpha}\pi-\acute{\alpha}\mu\acute{\alpha}\omega$ 「切り取る」の前つづりであろうが、同時に副詞的でもあり、また $\acute{\alpha}\pi\omicron \phi\acute{\iota}\lambda\omicron\upsilon\delta' \pi\alpha\tau\rho\acute{o}\varsigma$ 「わが父から」と考えれば、前置詞ともとれそうである。「イーリアス」の第一巻についてみると、Leaf and Bayfield の注釈書が tmesis を少なくとも 19 例(うち 1 例は副詞ともとれるとしながら)数えているのに対し、高津春繁はわずかに 4 例を tmesis として明示しているにすぎない。しかも、そのうちの 2 例は Leaf and Bayfield の 19 例の中に入っていない。さらに、両者とも tmesis として挙げしていない A 67 $\acute{\eta}\mu\tilde{\iota}\nu \acute{\alpha}\pi\omicron \lambda\omicron\iota\chi\rho\acute{o}\nu \acute{\alpha}\mu\tilde{\iota}\nu\alpha\iota$ 「我々から疫病を防いでくれるように」を E. Schwyzer は tmesis とする。このようにこの用語は学者によってまちまちに使用されているのである。

今日では一般に tmesis はあまり重要視されていないようだ。この用語を、前つづりと動詞との密接な結合が固定した、ホメーロス以後のギリシア語において初めて認め、ホメーロスの言語に適用することを誤りだとする学者(Herbert W. Smyth や高津春繁など)もいる。彼らは、ホメーロスの前つづりはまだ動詞との結合の途中にあるのだから、両者が離れているからといって tmesis だというのはおかしいと言う。^{注1} D. B. Monro や P. Chantraine も tmesis の熱心な擁護者とは言えない。^{注2} ちなみに、この用語はホメーロスのギリシア語の特質を、後に確立した用法からの逸脱であるとみなしたギリシアの文法家たちによって作り出されたものである。彼らは、例えば、これは実詞の例であるが、ホメーロスの $\pi\acute{o}\lambda\iota\varsigma \acute{\alpha}\kappa\rho\eta$ を $\acute{\alpha}\kappa\rho\acute{o}\pi\omicron\lambda\iota\varsigma$ の tmesis としていた($\acute{\alpha}\kappa\rho\acute{o}\pi\omicron\lambda\iota\varsigma$ の方が後に形成されたものであるのに)。

一方、Schwyzer は tmesis はすでにホメーロスの時代に複合動詞形よりもまれであり、形態語(多くは $\delta\acute{\epsilon}$)による分離を除けば、すでに詩的な古文体、少なくとも特殊性と感じられていたようだとし、この

用語を保持しており（他の箇所では Brugmann の „Distanzkomposita “ という用語を用いている）、J. Wackernagel も、詩人たちに真の tmesis が現われることは否定できない、ただし前つづりが人為的に切り離されているような場合だけを挙げるべきだ、と言う。そこで我々も「真の tmesis 」がいかなるものか考えることにしよう。

これまで我々は、例えば E21 περιβῆναι のような複合動詞形に対して P6 περὶ … βαῖνε のような形態を tmesis と呼んできた。^{注3} 従って、ここでは「複合動詞形が同時に存在すること」が tmesis の条件であると言えよう。しかし、P6 ὥς περὶ Πατρόκλῳ βαῖνε ξανθὸς Μενέλαος における περὶ … βαῖνε の意味は「（そのように、亜麻色の頭髪をしたメネラーオスは、パトロクロス）の周囲を歩き回っていた」であって、περὶ を単なる副詞とする可能性も依然として残っている。そこでもう少し強い条件が必要になる。それは概念上のまとまり、あるいは新しい意味の出現である。^{注4} 先に挙げた E21 οὐδ' ἔτλη περιβῆναι ἀδελφεοῦ κατένοιο 「……さりとて殺された兄弟を かばって立つ ほど思い切ってはやれなかった」における περιβῆναι のような抽象的な（あるいは比喩的な）意味の複合動詞がもし二分されたとしたら、その場合には「真の tmesis 」と言っていいだろう。

ところで、J. Zsilka という学者は、同じ動詞の tmesis 形と複合動詞形の意味の差異について考察した論文 „Das Problem der Tmesis in der Ilias “ の中で、次の三つのタイプが観察されると言う。

1. Tmes. : Komp. = konkr. : abstr.

2. Tmes. : Komp. = konkr. : konkr.

（ 3. Tmes. : Komp. = abstr. : abstr. ）

第一のタイプは、すでに挙げた περὶ … βαῖνε : περιβῆναι = 「周囲を歩き回る」：「かばう」のようなもの。最も大きなグループである第二のタイプは、例えば εἰς … ἐβήτην (Θ 115 τὼ δ' εἰς ἀμφοτέρω Διομήδεος / ἄρματ' ἐβήτην 「またこちらの二人は、一緒にディオメデースの戦車に乗って」) 対 εἰσβαῖνον (ι 103 οἱ δ' αἶψ' εἰσβαῖνον 「彼らは直ちに〈船に〉乗って」) = 《 sie treten irgendwo hinein 》：《 hinein(=treten) 》（日本語ではいずれも「乗る」で訳されるが）。第三のタイプに属する抽象的な意味の tmesis 形としては、例えば K99 ἀτὰρ φυλακῆς ἐπὶ πάγχυ λάθωνται 「見張りをまったく忘れていないか（訊ねて見ようよ）」。そして、第二のタイプの、具体的な意味の複合動詞は、その前つづりが具体性を失っているの、第一のタイプの、抽象的な意味の複合動詞と同じ抽象化の段階に達しているとして、いっそう特徴的な第一のタイプをホメーロスに一般的な原則として定式化した。^{注5} 一方、この公式に合わない第三のタイプの、抽象的な意味を持つ tmesis 形は、その出現数が少ないことやそれらがすべて交錯配列法（Chiasmus）に現われることなどから、すでに完成した複合動詞の意識的な切り離しによって二次的につくられたものであるとして、下位に置かれている。

いずれにしても、従来の、複合動詞となる過渡的現象としての Tmesis¹ と、作詩上の手段として二次的に成立した、抽象的な意味の Tmesis² とが存在するわけで、この Tmesis²こそ我々の言う「真の tmesis」に他ならない。さらに、有難いことに、Tmesis² は交錯配列法に生ずるという統語論上の物差しまでも手

に入れたのである。

-
- 注1. たしかにホメーロスのどの前つづりも動詞から離れて、ある時は文のかなり前に、ある時は動詞の後に立ち得る。しかしながら、ホメーロスによく現われる複合動詞で、*tnesis* が確認されていないものが全然ないわけではない。Wackernagel によれば、*καθεύδω* と *κάθημαι* がそうであり、これらはアッティカ・ギリシア語で単一語と同じように *augment* がつけられた (*ἐκάθευδον* , *ἐκάθημην*) ことから、かなり早い段階での密接な結合が判明している。
- 注2. Monro は *tnesis* が、後のギリシア語において一語を形成した二つの要素がホメーロスの言語ではまだ分ち得たという事実しか意味しないと我々が理解するならば、この用語を保有してもいいと言い、また Chantaine も、前置詞と副詞と前つづりの間の区別は最初の吟遊詩人たちにとって不可欠のものではなかったし、この問題をいつもきっぱりと解決できることは限らないと述べているだけである。
- 注3. この二つの例は、すぐ後で言及する Zsilka の論文から引用した。
- 注4. 第二の条件として挙げた「概念上のまとまり」は、語群の *Vereinheitlichung* (*Univerbierung*) の証拠として Schwyzer によって挙げられていたものを援用した。
- 注5. これにはまだ議論の余地があると思われる。